

# 立教女学院短期大学

## 公開講座編『天皇制を考える』

村井 早苗

立教女学院短期大学では、一九八九年十月より五回にわたって、「天皇制を考える」という公開講座を設けた。これは、同年一月七日に昭和天皇が死去し、この前後におけるさまざまな社会現象に危機意識を持ったことによる。つまり、「日本の社会や文化を理解し日本国の将来を展望するにあたって天皇制の歴史を無視できない」から、「天皇制とそれに関わる問題に無関心であることは許されない」という観点によって、天皇制について真剣に考えるため、この公開講座が持たれたのであった。本書は、この講座内容を活字にし、公表したものである。以下、それらの内容を概略してみよう。

島川雅史「天皇教と象徴天皇制」では、天皇死去前後に表出した、若者の天皇についてのとらえかたに言及している。島川氏は、立教女学院短大の学生の反応を中心に、若

者たちの多くは、ほとんど無意識的に天皇を頂点とする貴賤の序列を承認し、それは皮膚感覚的な現状肯定性向であると指摘する。さらに、宗教としての天皇制について、国家神道の成立・展開を中心に述べられている。

森井真「精神の自由と天皇制」は、フランス史研究者の森井氏が「一市民の意見として」天皇制に言及し、その内容は多岐にわたる。一九一九年生まれ森井氏が、自らの体験から、「天皇制」の社会を生き生きと再現される。リベラルな小学校で育ち、受験校の中学に入り、西洋史の時間にアメリカの独立宣言を学んだ時、その中で幸福の追求が天賦の人権だと謳われていたのに驚いたという話は、印象的であった。また、衣食住に何不自由ない、自分で考えたり、批判したり、判断したりする余地がなく、与えられるまま、決められたまま生きられる「幸せで健康な」軍隊生活を送った森井氏が、乞食を見て羨ましくて涙が止まらなかったという体験が語られる。そこから神権天皇制の支配する純粋空間である軍隊は、乞食をみて羨ましさに涙がこぼれるほどに、天皇の権威によって個人の自由が奪われていた場で、さらに、日本の社会そのものが、人間が自分の運命を自ら決め、自分でものを考え、批判し、判断し、選択する、精神の自由を奪われていたと指摘されている。そして、私たちが歴史から学んだことは、天皇が絶対化さ

れ神になると、批判を許さないその權威のもとで、国民の精神の自由や人権が奪われ、他の国民の人権に対しても鈍感となり侵略につながるのだと、結んでいる。

つづいてフランス文学者の平井啓之氏は、「近代天皇制と日本人の意識」について、三つの側面から検討されている。すなわち、第一に、近代天皇制は人為的構築物であり、第二に、それによって日本人の意識が変化させられ、第三に、天皇制はタブーをつくり、言論の抑圧に巧妙に働くということである。平井氏は一九二一年生まれで、職業軍人の息子として幼少教育を受け、そのために天皇制にこだわりを持つようになったと述べている。平井氏は、昭和天皇と同じ頃に死去された母親の遺品である二種類の女性の教養書（一八六六年刊・一八九五年刊）によって、明治の初めの三十年間に、いかに教育のシステムが変えられ、人心の改造が企てられたかを明らかにしている。

福沢道夫「天皇制と信仰」では、天皇制を支える要は、日本の家族制度、農業共同体、先祖崇拜としての神道の三つであることが指摘されている。そして、伊藤博文が西洋のキリスト教の役割を発見したときに、絶対神を天皇そのものに置き、国家統一を図ったとする。

最後に塚田理「天皇制とキリスト教」では、クリスチャンである塚田氏の体験が語られる。一九二九年に牧師の息

子として生まれた塚田氏は、高田師範学校付属小学校時代に、クラスの代表として天皇の「御真影」に参拝させられたり、小・中学校時代に神社参拝を強制されたりした経験を持つ。このことが、クリスチャンである塚田氏の心に、深い傷痕を残したのである。さらに、戦時中にキリスト教会や立教・上智大学などのミッションスクールが弾圧されたことに触れている。

以上、本書の内容について紹介したが、先ず、一九八九年秋という時期に、この公開講座を設けた、立教女学院短大の健闘を称えたいと思う。そして、以下、二、三感じたことを述べてみたい。

立教女学院は、言うまでもなく、ミッションスクールであるが、この講座では、クリスチャンであるなしにかかわらず、また、さまざまな分野を専攻する研究者が、世代を越えて、それぞれが出逢った「天皇」および「天皇制」についての体験を、生々しく語っている。各氏の体験とその持つ意味は、非常に迫力がある。

「なぜ天皇制が長く続いたか」という問いは、私たちにとって、重く、絶望的ともいえる課題である。この点について、森井真氏と福沢道夫氏が、稲作と天皇制との関係を指摘しているのは興味深かった。農業社会やその基盤となる共同体、家族制度、先祖崇拜がほとんど崩壊している現

代日本において、天皇とは何なのか、それはどう変わるのか、変らないのか、考えさせられた。一九九〇年十一月に強行された大嘗祭が、稲作と何らかの関係があるだけに、今後、煮詰めていかなければならない課題であろう。

このような「天皇制が長く続いた」という考え方に対して、平井氏は、近代天皇制とは人為的構築物であることを指摘され、福沢氏も、近代天皇制は伊藤博文らの構想によるものとされる。

本書は、公開講座の筆録という制約もあって、諸課題を

実証的に検討することはしていない。それゆえに、各氏が自らの体験をふまえて、熱意をもって投げかけられた課題を真剣に受けとめ、「天皇」および「天皇制」の、各時代における位置やその担った役割を、明らかにしていく努力が必要であろう。そうすることによって、「天皇」や「天皇制」を克服する道筋が見えてくるのではないだろうか。

（四六版、本文二〇二頁、一八〇〇円〔税込〕新教出版社）

（一九八〇年度立教大学日本史専攻博士課程満期退学・

日本女子大学文学部非常勤講師）